

# 手づくりハザードマップ作成手引き(参加者向け)ワークショップ 1日目



## ■手づくりハザードマップの作成の目的

手づくりハザードマップは、地域のみなさまが、地域の水害の危険性について“気づき”、正しく“理解”し、いざという時に的確な“判断”ができるように取り組む過程によって、個々の力となるとともに、地域コミュニティの活性化を図るものです。

2日間(半日を2回)のワークショップを通じて、勉強会/まち歩き/マップ作成/マイ・タイムライン作成を行います。



清須市洪水ハザードブック

“洪水ハザードマップ”から、地域で想定される最大規模の被害などを勉強します

洪水ハザードマップには、地域の近傍を流れる河川がはん濫した際に予測される最大の浸水深が記載されています。

その他にも、地域で指定されている避難所の場所や連絡先、避難情報の発令基準、いざという時の持ち物など、水害のときに役立つ様々な情報が記載されています。しかし…。

**そうってからでは遅い！ 早めの避難！**



平成12年東海豪雨 一宮市での内水氾濫の様子

“手づくりハザードマップ”では、洪水ハザードマップの状態に至るまでの予兆や過程(内水氾濫)と、行動のためのヒントをまとめます

洪水ハザードマップからは、地域の危険を知ることができますが、最大規模の被害を表現しているため、その状況になってから避難をしようとしても手遅れです。

手づくりハザードマップでは、「内水氾濫(側溝からあふれた水などによる浸水)」が始まり、さらに強い雨が降っている状態を地図にまとめることを通じて、避難の早期判断と行動につなげることを目指します。



## ■手づくりハザードマップの例(安城市藤野地区)



## ■ワークショップ1日目の進め方

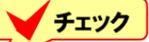
スタート

**A 勉強会**  
(全員で60分)

- (1) 洪水ハザードマップを学ぶ**  
地域の近傍を流れる河川がはん濫した際の、予測される最大の水深や地域の避難所などを学びます。
- (2) 地域の過去の被害を学ぶ**  
過去に地域で発生した水害の様子を紹介します。
- (3) 手づくりハザードマップの作り方を学ぶ**  
勉強会やまち歩き、地域で話し合った内容をどのように1枚の地図にまとめるのか、勉強します。

実際に地域を歩いて、大雨のときの問題や一時避難できる建物などを確認します。

**B まち歩き**  
(グループで60分)



大きな水害が発生する数時間前の、「内水氾濫(側溝からあふれた水などによる浸水)」が始まってさらに強い雨が降り続けている状況を思い描きながら、住み慣れた地域を改めて歩いてみると、普段見えないものが見えてきます。

「もし自宅の前の道路が、足首まで水に浸かっているとしたら？」  
「更に大きな水害になるような強い雨が降り続けているとしたら？」

**C マップ作成**  
(グループで60分)

- (1) まち歩きでの確認・発見を白地図に書き込んで、マップを作り上げよう**

“地域で最初に浸水する場所やその浸水の広がる方向”  
“浸水したときに見えなくなるフタのない側溝など危険な場所”  
“まだ浸水が少ないときに比較的 safely に歩ける避難路”  
“いざという時に避難できる避難所、たどり着けないときの一時避難所”

などなど、まち歩きで確認した・発見したこと、普段から気になっていること、昔からの言い伝えなど、どんどん書き込んでいきましょう。

- (2) 作業結果を発表しましょう**  
マップに書き込まれた内容をグループごとに発表し、全員で共有しましょう。

終了

お疲れ様でした。ワークショップ1日目の作業は終了です。  
“まち歩き”と“マップ作成”の進め方とポイントが次ページに記載されていますので、参考にしてください。  
また、マップを確かなものにするために、ワークショップ2日目があります。こちらにもぜひご参加ください。

「B まち歩き」のポイント

雨が強く降り、地域で浸水(内水氾濫)が始まっています！  
 付近の河川もどんどん増水しています！  
 さらに雨が降り続き、雷が鳴っている。そんな状況をイメージして歩きましょう。

○避難所の位置を確認しながら歩きましょう

避難所の位置を確認し、避難所までの経路をイメージしながら歩きましょう。  
 浸水により、避難所までたどり着けないことも考えられますので、ある程度の広さがあり、比較的高台で、高い建物がある場所を一時避難所とすると良いでしょう。建物の管理者との話し合いなどが必要となりますが、まずは避難所の位置をイメージしながら歩きましょう。

○よく浸水する場所について、考えましょう

まちを歩きながら、経験した水害を思い出したり、話し合ったりしましょう。  
 特に、くぼ地や、水が集まる場所、最初に浸水する場所など、経験した水害を話しあい、メモしましょう。

チェック箇所

地域の中で早く水が集まる箇所



堤防高や標高(浸水の方向)



一時避難できそうな高い建物



浸水しやすい場所や一時避難所

凸部分(浸水時に危険となる突起物)



凹部分(フタの無い側溝・マンホール等)



水が流れている箇所



避難の際に危険となる箇所

※まち歩きの最中は、発見した上記のような箇所を白地図にメモし、特に重要と思われるものについては写真を撮りましょう。

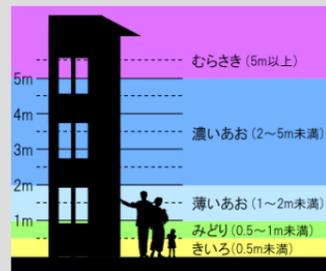
【まち歩きのQ&A】

Q:一時避難所は何を基準に設定したら良いですか？

A:「洪水ハザードマップ」で示される浸水よりも高く、公共性がある程度の収容力がある、建物や高台などにしましょう。

洪水ハザードマップは、想定される最大の浸水深を表示していますので、それよりも高く、ある程度の収容力がある建物が良いでしょう。

公共施設が良いですが、周囲にない場合は、中高層マンションや工場などが考えられます。建物の所有者や、マンションであれば住民とも話し合い、災害に備えて事前に利用のルール作りをすると良いでしょう。



「C マップ作成」の進め方とポイント

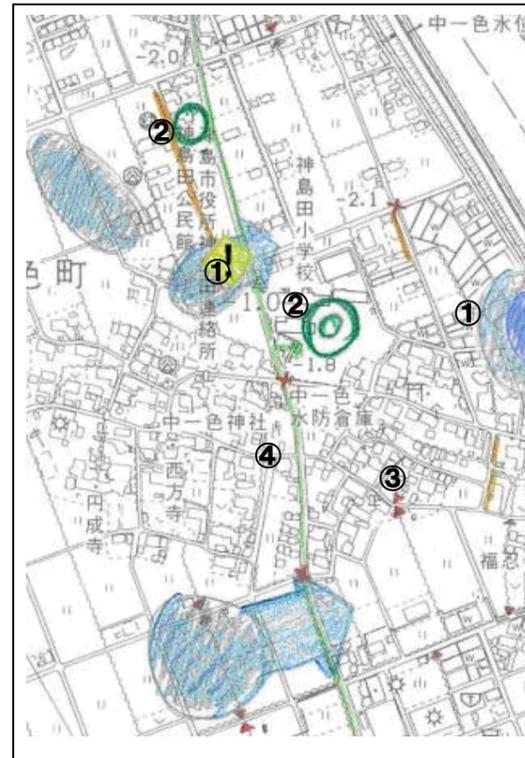
まち歩きで確認・発見したこと、普段から気になっていること、昔からの言い伝えなど、どんどん書き込んでいきましょう

①役割分担 (5分)

・話し合いの結果を白地図にまとめる「書記」と、発表会で発言する「発表者」を決めます。

②まち歩きの結果まとめ (30分)

・まち歩きで発見したことを、白地図にまとめることで、グループの手づくりハザードマップを作成します。



1. 水に浸かりやすい場所を水色で塗りましょう

過去の水害の経験や、地形などをもとに、早く浸水する箇所を、水色で塗り、その浸水が広がる方向を▶(矢印)で描きましょう。流れ込む水は→(濃い青色の矢印)で描きます。  
 ※地域で最も早く浸水する箇所を、!で描きます。  
 ※窪地で水が集まりやすく、天井まで浸水する恐れがある箇所があれば濃い青色(または紫)で塗ります。

2. 避難所を、○(緑の2重丸)で描きましょう

ある程度の高台で人数が集まれる空間がある高い建物を探し、一時避難ができそうな箇所があれば、○(緑の1重丸)を描きます。

3. まち歩きで把握した浸水時に危険となる箇所を赤とオレンジで記入します

凸部分(道路上の突起物)	× — (赤)
凹部分(側溝、水路やマンホール)	× — (橙)
水が流れている箇所	▲ (赤)

必ずしも全ての側溝やマンホール、河川堤防が危険とは限りません。そうした中でも、避難途上で注意を促す必要があるものについて記入してください。

4. 避難経路を→(緑)で描きましょう

避難の問題点を話し合い、安全な避難経路を描きましょう。  
 浸水が深くなる前の避難経路は→(緑・実線)  
 浸水が深くなった、または河川はん濫の後には→(緑・点線)

※凡例にない印を作った場合は、清書係の作業をしやすくするために、必ず印の意味を書いておきましょう。

③地域でできる水害対策の話し合い (15分)

- 緊急連絡網の構築 (取り残される人がないように、連絡網の構築について話し合います)
- 自主避難の呼びかけの必要性やあり方 (外から情報が届かなくても地域で安全が確保できます)
- 一時避難所の所有者とのルールづくり (地域全域が浸水するような地域では特に有効です)
- 要援護者の支援 (名簿は必要か? いつだれが支援を行うのか? など)

④発表会 (10分)

- ・各グループで作成したマップをもとに、発表会を行います。
- ・発表にあたっては、できるだけ「過去の水害の経験」や「その浸水の状況」などを交えて発表するように心がけましょう。

【ワークショップのQ&A】

Q:濃い青色(または紫)で塗る「窪地」というのは、どのような場所ですか？

A:ゲリラ豪雨で水が溜まりやすく、命の危険性がある場所です。

近年多発している「ゲリラ豪雨(予測できない短時間の集中豪雨)」が発生した場合、河川の水位上昇の前に、急激に「内水氾濫」が進展する可能性があります。水が溜まりやすいところでは大変危険になります。

過去の豪雨で、「内水氾濫」により被害があった場所を中心に、堤防が決壊しなくても2m以上浸水する可能性があるか、想像してみましょう。また、ゲリラ豪雨時はあまり情報が届きませんので、地域で声をかけ合う習慣づくりが重要になります。

